

## HARDY 項を持つ臨界指数楕円型方程式の正值解の多重存在について

塩路直樹 (横浜国大大学院環境情報)

この講演では、次の問題の正值解の多重存在について議論する。

$$(1) \quad \begin{cases} -\Delta u - \lambda \frac{u}{|x|^2} = |u|^{2^*-2}u & \text{in } \Omega, \\ u = 0 & \text{on } \partial\Omega. \end{cases}$$

ここで、 $\Omega$  は、 $0 \in \Omega$  を満たす  $\mathbb{R}^N$  ( $N \geq 4$ ) の有界領域で、その境界  $\partial\Omega$  は滑らかであるとし、 $\lambda \in (0, \bar{\lambda})$  とする。ただし、 $\bar{\lambda} = ((N-2)/2)^2$  とする。

Hardy の不等式

$$\bar{\lambda} \int_{\mathbb{R}^N} \frac{|u(x)|^2}{|x|^2} dx \leq \int_{\mathbb{R}^N} |\nabla u(x)|^2 dx, \quad u \in D_0^{1,2}(\mathbb{R}^N)$$

が成り立つことを注意しておく。

$\mathbb{R}^N$  の開集合  $\Omega$  に対して、内積  $\int_{\Omega} \nabla u \nabla v dx$  による  $C_0^\infty(\Omega)$  の完備化を  $\mathcal{D}_0^{1,2}(\Omega)$  と定め、

$$I^{(\Omega, \lambda)}(u) = \int_{\Omega} \left( \frac{1}{2} |\nabla u|^2 - \frac{\lambda}{2} \frac{|u|^2}{|x|^2} - \frac{1}{2^*} |u^+|^{2^*} \right) dx, \quad u \in \mathcal{D}_0^{1,2}(\Omega)$$

と定める。 $I^{(\Omega, \lambda)}$  の非自明な臨界点が、(1) の正值解に対応する。

$\lambda \in [0, \bar{\lambda})$ ,  $(z, \varepsilon) \in \mathbb{R}^N \times \mathbb{R}^+$  に対し、

$$u_{(z, \varepsilon)}^{(\lambda)}(x) = \frac{(N(N-2)\nu_\lambda^2 \varepsilon^{2\nu_\lambda})^{\frac{N-2}{4}}}{|x-z|^{1-\nu_\lambda} (\varepsilon^{2\nu_\lambda} + |x-z|^{2\nu_\lambda})^{\frac{N-2}{2}}}$$

と置く。ただし、

$$\nu_\lambda = \left( 1 - \frac{4\lambda}{(N-2)^2} \right)^{\frac{1}{2}}$$

である。 $(z, \varepsilon) \in \mathbb{R}^N \times \mathbb{R}^+$  に対し、 $u_{(z, \varepsilon)}^{(0)}(x)$  は、

$$u \in \mathcal{D}_0^{1,2}(\mathbb{R}^N), \quad -\Delta u = |u|^{2^*-2}u$$

の正值解である。また、Terracini [2] は、 $\lambda \in [0, \bar{\lambda})$ ,  $\varepsilon \in \mathbb{R}^+$  に対し、 $u_{(0, \varepsilon)}^{(\lambda)}(x)$  は、

$$u \in \mathcal{D}_0^{1,2}(\mathbb{R}^N), \quad -\Delta u - \lambda \frac{u}{|x|^2} = |u|^{2^*-2}u$$

の正值解であることを示している。各  $\lambda \in [0, \bar{\lambda})$  に対して、

$$\begin{aligned} \mathcal{S}_\lambda(\Omega) &= \left\{ u \in \mathcal{D}_0^{1,2}(\Omega) \setminus \{0\} : \int_{\Omega} \left( |\nabla u|^2 - \lambda \frac{|u|^2}{|x|^2} \right) dx = \int_{\Omega} |u^+|^{2^*} dx \right\}, \\ c_\lambda &= \inf \{ I^{(\Omega, \lambda)}(u) : u \in \mathcal{S}_\lambda(\Omega) \} \end{aligned}$$

と置く。  $c_\lambda$  は  $\Omega$  に依存しないことが知られている。  $\Omega = \mathbb{R}^N$  の場合は

$$c_0 = I^{(\mathbb{R}^N, 0)}(u_{(z, \varepsilon)}^{(0)}) \quad \forall z \in \mathbb{R}^N, \forall \varepsilon > 0, \quad c_\lambda = I^{(\mathbb{R}^N, \lambda)}(u_{(0, \varepsilon)}^{(\lambda)}) \quad \forall \varepsilon > 0$$

のように下限が達成されるが、また、  $\Omega$  が有界領域の場合は下限は達成されない。 $I^{(\mathbb{R}^N, 0)}$  は、  $nc_0$  ( $n \in \mathbb{N}$ ) で PS が崩れ、  $I^{(\mathbb{R}^N, \lambda)}$  は、  $nc_0 + mc_\lambda$  ( $n, m \in \mathbb{N} \cup \{0\}, n+m \geq 1$ ) で PS が崩れることが知られている。さらに、  $\Omega$  が 0 を中心とする星型有界領域の場合は、Pohozaev 型の不等式により、(1) は  $\mathcal{D}_0^{1,2}(\Omega)$  に属する解を持たないことも知られている。

$\Omega$  が非可縮な場合に正值解が存在するという結果は [1] で得られているが、本講演では、正值解の多重性についての次の結果を報告する。

**定理.**  $N \geq 4$  とする。有界領域  $\Omega (\subset \mathbb{R}^N)$  は、  $0 \in \Omega$  を満たし、その境界  $\partial\Omega$  は滑らかであるとする。さらに、  $\Omega$  は可縮ではないとする。このとき、十分小さい  $\lambda > 0$  に対して、(1) は、少なくとも  $\text{cat } \Omega - 1$  個の正值解を持つ。

証明には Willem [3] による相対カテゴリーを用いる。  $X$  を位相空間とし、  $Y$  を  $X$  の閉部分集合、  $A, B$  を  $X$  の部分集合とする。  $Y \subset A \cap B$  が成り立ち、かつ

$$h(0, u) = u \quad \forall u \in A, \quad h(1, u) \in B \quad \forall u \in A, \quad h(t, Y) \subset Y \quad \forall t \in [0, 1]$$

を満たす  $h \in C([0, 1] \times A, X)$  が存在するとき、  $A \prec_Y B$  in  $X$  と定める。

$X$  を位相空間とし、  $Y, A$  は  $X$  の部分集合で、  $Y$  は閉集合とし、  $Y \subset A$  とする。次を満たす  $n+1$  個の閉集合  $A_0, A_1, \dots, A_n$  が存在するような最小の  $n$  を  $\text{cat}_{X,Y} A$  と定める。

- (i)  $A \subset \bigcup_{i=0}^n A_i$
- (ii)  $A_0 \prec_Y Y$  in  $X$

$$\left( Y \subset A_0, \exists h \in C([0, 1] \times A_0, X) \text{ s.t. } h(0, u) = u, \forall u \in A_0, \right. \\ \left. h(1, u) \in Y \forall u \in A_0, h(t, Y) \subset Y \forall t \in [0, 1] \right)$$

- (iii)  $A_1, \dots, A_n$  は  $X$  において可縮

このような  $n$  が存在しない場合は、  $\text{cat}_{X,Y} A = \infty$  と定める。

$Y = \emptyset$  のとき、  $\text{cat}_{X, \emptyset} A$  の代わりに、  $\text{cat}_X A$  と書く。  $Y = \emptyset, A = X$  のとき、  $\text{cat}_{X, \emptyset} X$  の代わりに、  $\text{cat } X$  と書く。

**補題 1.**  $X$  を位相空間とし、  $Y, A, B$  は  $X$  の部分集合で、  $Y$  は閉集合とし、  $Y \subset A$  とする。このとき、次が成り立つ。

- (i)  $\text{cat}_{X,Y}(Y) = 0$
- (ii)  $A \subset B \Rightarrow \text{cat}_{X,Y}(A) \leq \text{cat}_{X,Y}(B)$
- (iii)  $\text{cat}_{X,Y}(A \cup B) \leq \text{cat}_{X,Y}(A) + \text{cat}_X(B)$
- (iv)  $\exists \eta \in C([0, 1] \times X, X)$  such that  $\begin{cases} \eta(0, u) = u & \forall u \in A, \\ \eta(t, Y) \subset Y & \forall t \in [0, 1] \\ Y \subset \eta(1, A) \end{cases}$   
 $\Rightarrow \text{cat}_{X,Y}(A) \leq \text{cat}_{X,Y}(\eta(1, A))$

距離空間  $X$  が ANE であるとは、任意の距離空間  $E$  とその閉部分集合  $D$ 、連続写像  $f: D \rightarrow X$  が与えられたとき、適当な  $D$  の近傍  $U$  および  $f$  の連続な拡張  $F: U \rightarrow X$  が存在することとする。

$\mathcal{S}_\lambda(\Omega)$  の (相対位相での) 開部分集合は ANE であることが知られている。特に、  $\{u \in \mathcal{S}_\lambda(\Omega) : I^{(\Omega, \lambda)}(u) < b\}$  は ANE である。

補題 2.  $X$  は距離空間で、ANE とする。  $A \subset X$  に対して、

$$B \text{ は } A \text{ の閉近傍, } \text{cat}_X(B) = \text{cat}_X(A)$$

を満たす  $B \subset X$  が存在する。

十分小さい  $\lambda > 0$  を取り、固定する。少なくとも  $\text{cat } \Omega - 1$  個の正值解の存在を示すのが目標なので、  $\{u \in \mathcal{S}_\lambda(\Omega) : I^{(\Omega, \lambda)}(u) \in (-\infty, a_0] \cup [b_0, c_0), \nabla I^{(\Omega, \lambda)}(u) = 0\} = \emptyset$  を満たす  $c_\lambda < a_0 < b_0 < c_0$  が存在するとして良い。  $a, b$  を、  $c_\lambda < a < a_0 < b_0 < b < c_0$  を満たすようにとる。ただし、  $a$  は  $c_\lambda$  に十分近いとし、  $b$  は  $c_0$  に十分近いとする。

$$X = \{u \in \mathcal{S}_\lambda(\Omega) : I^{(\Omega, \lambda)}(u) < b\}, \quad Y = \{u \in X : I^{(\Omega, \lambda)}(u) \leq a\}$$

と置く。また、  $c \in \mathbb{R}$  に対して、  $K_c = \{u \in \mathcal{S}_\lambda(\Omega) : \nabla I^{(\Omega, \lambda)}(u) = 0, I^{(\Omega, \lambda)}(u) = c\}$  と置く。さらに、各  $j \in \mathbb{N}$  に対し、次のように  $\mathcal{A}_j, c_j$  を定める。

$$\mathcal{A}_j = \{A \subset X : A \supset Y, \text{cat}_{X, Y} A \geq j\},$$

$$c_j = \begin{cases} \inf_{A \in \mathcal{A}_j} \sup_{u \in A} I^{(\Omega, \lambda)}(u), & \mathcal{A}_j \neq \emptyset, \\ \infty, & \mathcal{A}_j = \emptyset \end{cases}$$

$c_\lambda < a < a_0$  より、各  $j \in \mathbb{N}$  に対して、  $a < c_j$  が成り立つことを注意しておく。

以下に示す補題 4, 5, 6 により、定理は証明される。

次は補題 4 に含まれるため、述べる必要ないのだが、述べておく。

補題 3.  $c_k < b$  ( $k \in \mathbb{N}$ ) とすると、  $K_{c_k} \neq \emptyset$  が成り立つ。

この補題だけだと、  $c_1 < c_2 < c_3 < b$  のような場合は、少なくとも 3 個の臨界点が存在すると言えるが、  $c_1 < c_2 = c_3 < b$  のような場合は少なくとも 3 個の臨界点が存在するとは言えない。しかし、次の補題が成立する。

補題 4.  $k \in \mathbb{N}, m \in \mathbb{N} \cup \{0\}$  とし、

$$c \equiv c_k = \cdots = c_{k+m} < b$$

とする。このとき、  $\text{cat}_X(K_c) \geq m + 1$  である。

以上の補題により、  $c_j < b$  ならば、少なくとも  $j$  個の臨界点が存在することがわかった。なぜなら、  $c_j < b$  ならば、  $c_1 \leq c_2 \leq \cdots \leq c_j < b$  となるからである。

次の 2 つの補題によって、(1) は、少なくとも  $\text{cat } \Omega - 1$  個の正值解を持つことがわかる。

補題 5.  $\text{cat}_{X, Y} X \geq j$  とすると、  $c_j < b$  が成り立つ。

補題 6.  $\text{cat}_{X, Y} X \geq \text{cat } \Omega - 1$

## 参考文献

- [1] N. Hirano and N. Shioji, *Existence of positive solutions for a semilinear elliptic problem with critical Sobolev and Hardy terms*, Proc. Amer. Math. Soc. **134** (2006), 2585–2592.
- [2] S. Terracini, *On positive entire solutions to a class of equations with a singular coefficient and critical exponent*, Adv. Differential Equations **1** (1996), 241–264.
- [3] M. Willem, *Minimax theorems*, Progress in Nonlinear Differential Equations and their Applications, 24, Birkhäuser Boston Inc., Boston, MA, 1996.